

〔講演〕

人は死んで何を残すのか — 新渡戸稲造の場合 —

佐藤全弘

一、はじめに

誰でも知っている言葉に、「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」というのがあります。これは鎌倉時代中期の『十訓抄』（一二五二）という本にある句で、奈良時代の僧行基が菅原寺で入寂の際、弟子たちに述べた言葉だと伝えられています。

「名を残す」というのなら、どこに残すのでしょうか。墓石に刻みこんでおくのでしょうか。しかし曾津やいち八一の言うところでは、石に刻んでも、まず六百年もすれば、雨風にうたれ、日に焼かれ、石は欠け砕け落ちて、名は読めなくなるのです。花崗岩（御影石）^{みかげいし}でさえそうですから、軟い砂岩ならその半分もてはよい方でしょう。

では生きているうちに（或いは死んですぐ後に）記念館を建てて、遺品や作品を飾ればよいと言うのかもしれませんが、それは違います。記念館を建てた当座は、弟子もおり、世の人も知っており、遺族もいることゆえ訪問者が多く見

えましようが、五十年もすれば知る人も少なくなり、客はとんと来なくなり、電気代、暖房費、人件費、修理代その他もろもろを考えれば、もう門を閉ざそうかという時が来ないとも限りません。造った以上、百年も千年もというのは悪趣味です。

それなら、紳士録に名を留めればよいという意見もありましょう。これはずっと簡単ですが、これもだめです。日本では明治から続いて出されてきた『紳士録』も、もう廃刊になりました。インターネットに負けたのです。アメリカでも、人名録の見本を一人半頁ぐらゐに作って送りつけ、購入予約を強制するので断りますと、その人の分は印刷から外してしまうという悪どい人名録もあります。そんな人名録に名を入れて喜ぶ人は、儲け本位の出版社の喰いものになるまでです。

芸術家は学者や政治家と比べるとずっと名を残し易いと思われまゝ。とくに、絵画・彫刻・音楽などは、美的価値があるうちは人々が求めますから、名は残ります。美空ひばりや、ベートーヴェンや、ゴッホやピカソなどは残ります。書は残しにくいですが、それでも骨董価値のある間は大丈夫でしょう。

それらの人たちが、ふつうの人が残すものは何でしょう。

金は遺産にすれば残りますが、相続税がつき、代を累ねることに減ってゆきます。家は居宅でも別荘でも、手入れが大変です。人が住まねば七十年位がまず限界でしょう。

土地は永久に遺せましようか。詩篇四九篇一〇―一二節にあるように（新共同訳）、

「人は永遠に生きようか。

墓穴を見ずにすむであろうか。

人が見ることは、知恵ある者も死に

無知な者、愚かな者と共に滅び

財宝を他人に遺さねばならないということ。

自分の名を付けた地所を持っていても

その土の底だけが彼らのとこしえの家

代々に、彼らが住まう所」

なのです。

子孫を遺すことは、特に狙わなくても遣りますが、「親しんど、子樂、孫乞食」と大阪の諺にありますように、親の名を後世に正しく遺す子孫を得ることは、難しいことです。

では著作を残すかという点、真に価値ある著作は百年も千年も読まれつづけ、人類の宝となりましようけれど、それらは残そうと思わなくても残るのです。むりに著作集を作っても、百年の後、真に人々が心の糧とするものは実に少ないのです。

そこで、新渡戸稲造はでは何を残すことができたか、という問いが、重要な意味を帯びて立ち現れてくるのです。

二、新渡戸稲造は何を残すことができたか

これまでたいていの人が残そうとしたもの、残したものをまず見てみましょう。

① 金

新渡戸稲造はその職業生活を国家公務員（開拓使の下にある札幌農学校の教授）として始め、そのご随分転職しましたが、公務員の時が最も多くありました。

農学校教授としては、給料は月五十円をもらっていました。当時小学校の先生の初任給は七円から十円でしたから、その七倍です。台湾で糖業に従事した時は、さらに多くの給料をもらいましたし、京大教授、一高校長、東大教授としてはさらに高額の給与を受け、国際連盟事務次長としては、それらをも上まざる手当を与えられました。

そして、新渡戸の書いた本は、英文『武士道』も、その日本語訳も、若い人々のために書いた『修養』も、生前実に

多くの版を重ねました。『修養』などは百五十版以上を出しました。印税だけでも相当のものでした。

そのほか、日本でも外国でも、実に多くの講演を行いました。死の四年前に行った一つの講演では、七百円の謝礼を受けたことが知られます。今なら三千倍としても二百万円です。その頃の東京帝大の教授の給与は月二百円ですから、その額の程は知られます。

けれども、新渡戸稲造はそれら多額の収入を貯めこんだり、贅沢三昧に使ったりはしませんでした。メリー夫人もその点、心は同じで、多く入った金は、慈善に、人助けに、しかも名を伏せて使いました。

ですから、七十一歳で召された時、遺族は生活に困るほどでした。預金は三千円ほどしかなく、千二百坪（三八八八平方米）の宅地に二十七室をかまえる大邸宅に住み、使用人は十五人もいたのでしたが、現金収入がなかったからです。手もとに残された書画骨董を売って（というより、出入りの弟子に頼んで売ってもらって）、生活の資に充てたりでした。外国製のカーテンまで売られたと聞きます。

新渡戸は金を残そうとはせず、現に徹底して残さず、家族もそれによしとしていたのです。

② 家

明治四十年頃、新渡戸は東京の山の手にある小日向台町に居宅をかまえました。それは死ぬ迄の居住地でした（カナダで死んだのですが）。千二百坪の地に二十七の和室・洋室を構まえ、庭には萩に椿、その他美しい灯籠を適地に、姿優しい樹々が繁り、門から玄関までもふさわしい植込みのある、立派な大邸宅でした。

今の日本のふつうの一戸建住宅は、ゆとりあるもので宅地はまず六十坪、室数は五つぐらいですから、その二十倍です。この大邸宅は一九四五年のアメリカ空軍の空襲で、全焼してしまいました。その前に遺族は難を避けて他に居を移しておられました。残された家具や書画類はすっかり燃えてしまいました。

新渡戸家は稲造生前から、軽井沢に別荘をもち、夏は七月から九月迄ここで過ごしました。宅地はとても広く、その中かなりの大きさの池があり、その池には山清水音が音をたてて注ぎ、全日本幼稚園指導者の

大会の記念写真はその池の向岸の道一杯に堤をうずめた先生たちを、こちら側の岸から写しています。

この別荘は一九三八年（昭和一三）メリー夫人が亡くなった夏のあと、人手に渡りましたが、今もそのあたりの地名に名を留めています。その何千坪もの別荘地は、いくつかに分けられて売却されたのです。

もう一つ、冬暖い地に寒さをしのぐための別荘として、鎌倉にも別荘がありました。これも稲造没後、彼がよく入院した聖路可病院の看護師さんたちの保養施設にと、寄附されました。

私が養女のこと様を初めて訪問したのは、一九七七年（昭和五二）四月のことですが、当時こと様のお住居は、東大久保にある古い四階建のマンションで、エレベーターもついていないところでした。二DKのその住居で、こと様は永年すごしておいでだったのです。

③ 土地

小日向台町の邸宅跡には、財務省の官僚住宅マンションや、その他多くの居宅が建っています。元新渡戸家が所有していた他の土地、山林も、今は殆どありません。

④ 本

新渡戸稲造は、札幌農学校生徒であった四年間に、クラークがアメリカから持参し、学校図書館に蔵書とした何千冊の本のうち、文科系の本―歴史、文学、キリスト教、地理その他―は殆んど読み、そのために強度の近視になりました。その後の研究、随筆、講演をみても、その背景には和漢洋の膨大な書物が心に留まり、随所に記憶から呼びさまされて、文に潤いを与え、ユーモアを添え、読者の魂を駆け、その悲しみを慰め、その傷を癒し、その勇を鼓していることがわかります。

あれだけ忙しい身で、多くの仕事にたずさわりつつ、よくこれだけの読書ができ、読んだものが常に魂に貯えられ、活用されて世を益することができたのに、ただただ驚くばかりです。

稲造の没後、遺族はその蔵書のほとんどをしかるべき関わりのある学校に寄贈しました。

稲造はその生前にも、あちこちの学校へゆくとき、蔵書を持参し、それをその学校に寄附してゆくことがありました。蔵書には、若い時から蔵書印が押されているので、すぐわかります。私もそんな洋書を一冊もっています。大阪市立大学図書館が本の大整理をしたとき、本来大学蔵書ではない、新渡戸蔵書印の押されたその本をみつけ、私が新渡戸を研究していることを知っているので、私にくれたものです。その本がどこからどうして入ったのか、その由来は全くわかりません。そんなことは随分あつたと思われます。

さて、東京女子大学へは、稲造没後遺族が一九四〇年頃に、キリスト教、歴史、伝記、文学など、農学の専門書以外の洋書約三、三〇〇冊を一括寄贈され、「新渡戸稲造文庫」としていましたが、稲造の本はそれ以外生前にも、稲造が来校の度に持参し寄附したものが一般書庫に混入しており、それらを全部選び出して、「新渡戸稲造記念文庫」として一つにまとめられ、立派な「記念文庫目録」が一九九二年三月に出版されました。そこには五七六七冊が収録されていますが、たとえば叢書などでは、九冊全五六二〇頁の『二カイヤ会議以前の神父たち』は、まとめて一つの番号とされ、英語欽定訳聖書などは、全三二冊が一つ番号となっています。もしこれらを各冊ごとに番号を一つずつ与えるのであれば、この二種の本だけで三九冊の本がふえるのです。

ですから、この東京女子大学の『新渡戸稲造文庫』に収められている本は、まず七〇〇冊は下らないと思われます。このすべて洋書の、中には今とても手に入らないジャンヌ・ダルク関係の本や、リンカーンの死後アメリカで出た様々の追悼作品は、日本では他には絶対ないと思えます。

次に新渡戸稲造の蔵書がまとまって寄贈されたのは、北海道大学です。これも戦前に寄附されたのですが、農業を中心とした経済学関係の外書が約三、〇〇〇冊あります。こと様から北大名誉教授で札幌農学校では同期の二期生の宮部金吾にあてた手紙の一つで、こと様は「多量の書籍を収めた数多くの箱の送料を、北大の方で負担してもらえないでしょうか」と、尋ねておられます。たぶんそう計らわれたことでしょう。

この他に、稲造がロンドンにいた一九二〇年に、アダム・スミスの蔵書三〇〇冊余りが売りに出、大戦で力を失った

西洋人を抑えて新渡戸が買い取り、東京帝大へ送り、『アダム・スミス文庫』が成り立ちました。

さらに、帰国してから（昭和二年に）、十和田に和書約三〇〇〇冊を送り、これを財団法人を作つてその管理下に置くように、と何度も注意したのでしたが、十和田の新渡戸家は遂に稲造の生前にその手続きをとらず、恐らく今も法人の持ち物とはしてはいないと思われます。

いずれにしても、生前死後を通じて、和洋書籍（洋書の方が三倍半以上の数）を計一四〇〇〇冊も、然るべき所を選んで寄附したのです。それで戦災を免れることとなりました。

⑤ 芸術品

江戸時代初期から南部家に仕える旧家の新渡戸家には、古美術品がありました。また明治以後も、数多くの芸術品、歴史的証拠が集まつてきました。例えば乃木希典大将が新渡戸家を訪問したとき、メリー夫人の頼みに応じ、羽二重の生地に筆を揮つて自作の和歌一首、「かたらしとおもふころもさやかなる月には恵こそかくさざりけれ」を書いたものや、第一次大戦後ジャンヌ・ダルクが列聖されて、フランスでその彫像がいろいろ製作されたなどは、新しい記念品です。

さきにも少しふれましたように、絵画や書の多くは、稲造の没後、生活費を得るため売られましたし、一部は疎開して残り、さきのにのべたジャンヌ・ダルク像は、後に盛岡市立先人記念館に寄附されました。小日向台の家に置かれたままのものは、戦火で烏有に帰してしまいました。

稲造自身の筆を揮つたものも、他人の依頼によるものはその人に与え、そうでないものも惜しみなく人にあげて、新渡戸家自身には多くは残っていないのです。新渡戸家には、武士の心得がそのまま生きていて、家や金はもとより、本であれ芸術品であれ、有形物を地にて残そう、持ち続けようという気持が無いことを、私はひしひしと感じたのでした。

⑥ 子孫

ドイツの精神病理学者クレッチュマー（Kretschmer）はその『天才の心理学』（岩波文庫）で、天才が出た家系は、

二―三代で絶えるとして、モーツアルト、ベートーヴェン、ゲーテはじめ多くの人の例をあげています。

新渡戸家にもこれは当てはまるかと思うのです。

稲造とメリーの間には、一八九二年一月十九日に男児遠益とんえきが生まれましたが、二十七日には死に、二度と子供は授かりませんでした。のち、一八九八年（明治三〇）七月十一日に四姉喜佐（一八五七年生れ）の次男孝夫よしお（一八九二年生れ）を養子とし、さらに長姉峯の孫娘稲田こと（一八九〇年生れ）が一九〇五年（明治三八）に新渡戸家に入り、のち一九一五年正式に養女となり、一九一七年（大正六）九月二十七日二人は結婚し、一九一八年には誠を、一九二〇年には武子ゆきこをもうけ、誠は一八九五年に六十七歳で子なくして死に、武子は加藤英倫えいりん（一九〇八―二〇〇八）との間に幸子ゆきこ（一九四五年生れ）を得ましたが、幸子は独身であり、新渡戸本家の方はやがて絶えると思われまます。

新渡戸稲造はこのように、人がこの世に遺しうるすべてのものうち、有形物はほとんど遺さなかったことになります。それは一つには戦争をはさむ多大な世の変化、戦災、また、稲造が結婚した時メリーは三十四歳であったことかわり、その他偶然な事柄も働きますが、クレッチユマーの示唆は大いに意味あると思われるのです。

三、新渡戸稲造の謙遜

①鈴木修次との対話その他

一九二四年（大正一三）十一月二日、稲造は一九二〇年から勤務している国際連盟に公式休暇を申し出て、前年九月一日起った関東大震災のあとを見舞い、かつ国際連盟のことを殆ど知らない日本国民一般にその知識を広めるために、就任以来初めて日本へ帰りました。

もちろん、排日法案（一九二四年五月二六日）発効中ゆえ、インド洋廻りの船旅で帰国し、白山丸上でも日本人船客に講演、十二月八日神戸に着きました。

以来、翌一九二五年二月十五日、賀茂丸で神戸から帰路につくまで、七十日の在日中に東は水戸、西は熊本まで、

小は普連士^{フレンド}女学校の女学生から大は財界人、大臣、皇族まで、少は一五名から多は二五〇〇人の集会まで、さまざまな会合で講演し、学校や地方都市で国際連盟協会の設立を促し、遠いヨーロッパのことばかり考えていた日本国民に、人類初のこの国際機構を理解させようと、懸命の努力をつづけました。クリスマスとお正月を含む七十日間に、講演じつに八十三回、聴衆五一〇九〇人に語りかけたこと、ジュネーヴ帰任後、ドラモンド総長に提出した報告書に、新渡戸自身を書いていきます。

この強行講演旅行で、一九二五年一月二十四日、長崎市の中島会館で、国際連盟協会長崎支部と長崎高商支部主催の講演会が行われ、稲造は連盟の理想と活動の現状について熱弁を振りました。その時聴衆の一人で長崎高商の学生かつ国際連盟長崎高商支部の役員をしていた鈴木修次（一九〇四—一九九二）と会い、連盟について日本での啓蒙に尽くすよう頼みました。鈴木はその縁で上京して鶴見祐輔や後藤新平の書生となつて助け、一九二八年八月から三年間はジュネーヴでも働きました。

晩年には「百働会」を組織して、百歳まで世の為に尽す志の人々を集め、講演会や慈善事業に尽しました。一九九二年四月八日開かれ、鈴木氏がこの年五月二十八日召されたので、最後の百働会となつた集まりには、私も招かれて「新渡戸稲造とジャンヌ・ダルク」の話をしました。一緒に講壇に立ったシャンソン歌手の石井好子女史に、鈴木氏はフランス輸入の「ジャンヌ・ダルク像」（45cm大）を贈り、会場を動きまわつて世話しておられました。

さてその鈴木修次が算え歳三十の一九三三年七月十四日、上野の精養軒での或る会に出るのに時間があつたので、稲造と三越の食堂の片隅で心太と寒天をいたたきながら会話を交しました。そして鈴木は、稲造の遺骨が帰国して、青山斎場で同年十一月十八日フレンド派式の葬儀が行われるので、新渡戸もよく筆を執つた「新自由主義」誌十一月号に「噫、新渡戸先生」と題する追悼文を寄せたのですが、その中にその時の会話を録しています。

この年八月二日、稲造は第五回太平洋会議に横浜からヴァンクーヴァーへ向けて船出するのですから、その死へ出発の十九日前の対話です。鈴木が

「二日四回も講演するのは健康にわるいから、呉々もご用心していただきたい」

と注意申し上げたのに答えて、新渡戸は、

「俺が死んで三年リMEMバアする奴があるか」と響に応ずることく答えたといひます。

これと同じ感想を新渡戸は国際連盟在任中、その職員や同僚にもつねに語り、また家族にもよく言っていました。私がか、こ、様、から直接承つた言葉でいひますと――

「自分が死んだあと二十年たつたとき、自分を理解し覚えていてくれる人がたつた一人でもおれば満足だねー」
との言葉に、家族の方が、

「まさか！ たつた一人！ たつた二十年！」

と言うと、稲造は応えて、

「人間はそんなものだよ！」

と言つたとのことでした。

② 『偉人群像』

『偉人群像』は、一九三一年（昭和六）十一月、実業之日本社から出版された本で、稲造晩年の著作です。昭和四年から、稲造は関わりをもつこととなつた「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」紙上に、その海外生活中親しく接した秀れた人物の印象を連載しました。それらの文章はとても好評を博したので、後には日本の指導的人物の印象をも書き、それらを集めて成つたのがこの本です。

ジュネーヴの国際連盟本部で事務次長を七年つとめた稲造は、連盟に姿を見せる各国の政治家、文化人、さらには稲造自身が各国に向向いたとき出合つた偉人とのふれあいを中心に、同じく直に接した日本の偉人をもとりあげて、偉人像、巻、を見事に描き上げたのでした。しかも、その人と交わした対談をそのまま復元して。

例をあげれば、ロイド・ジョージ（英・政治家）、チェンバレン（英・外交官）、ギルバート・マレー（英・古典学者）、

バルフォア伯（英・政治家）、ブランディング（スエーデン・政治家）、ロマン・ローラン（スイス・作家）、バデレウスキー（波・ピアニスト兼政治家）など。日本では伊藤博文、桂太郎、児玉源太郎、乃木希典、竹内栖鳳、後藤新平です。

これらの中の、ドイツのシモレル（経済学者）らのことを述べた「第廿六章 学徒の模範」の初めの節「政治家と学者の寿命」に、次の一節があります。まず政治家に関して――

「恐らく今日日本においても一時相当世間に聞えた人にして、今日は全然影も形も見えなくなり、たまさかその人の名を述べれば「まだ生きてゐるのか」などと、人が不思議に思ふくらゐのものである」といい、ついで、

「学徒になれば、第一流とゆかずとも、彼らの寿命は政治屋よりは確に長い。己れが世を去つてもその著述が相当に人にも読まれ、口も利く」

とあり、その次に大事な発言がみられます。

「もつとも我輩自身も少からず書物を公にしたが、自分では、もし死後十年自分の著述を読む人があつたなら、その読者に土の下から深い感謝を述べたい。恐らく死後三年を長らへる著述は、自分にはあるまいと日ごろ思つてゐる。これは自分は真の学徒ならざる故である」（全集五卷五三六―五三七頁）。

まことに新渡戸稲造の謙遜をこの上なくよく示す文章です。これは平素家族に語つておられた前に引いた文とも同じ心から出ているもので、決して自分を飾つて言うものではありません。旧約の箴言一八章一二節に「破滅に先立つのは心の驕り、名誉に先立つのは謙遜」とあるのにまさに当てはまります。

四、新渡戸稲造の影響

①教育の新渡戸

新渡戸稲造ほど仕事を次々と変った人は少ないでしょう。学校の主なものだけあげても、母校札幌農学校での教職、台湾総督府での蔗糖栽培改良、京都帝大教授、第一高等学校校長兼東京帝大教授、東洋協会殖民専門学校（現拓殖大学）学監、東京女子大学学長、その他普連土女学校、女子経済専門学校（現新渡戸文化学園）、恵泉女学園、女子英学塾（現津田塾大学）、杵家弥七女塾などにもあるいは校長、あるいは社友（理事）その他名称はともあれ実質的支援を行いました。

しかし、これら多数の学校の中でも、新渡戸自身が創立し、援助を終生続け、死後も遺族が支持を続けたものは、遠友夜学校、ただであります。福沢諭吉とは違うのです。

これら多くの学校のほかに、記念日などに訪れて講演した学校は、北海道大学はじめ、本州、四国、九州のとくに札幌農学校出身者が校長をつとめる学校などに多く、また郷里岩手では夏に汽車、人力車、バス、舟などを利用して、一夏何度かに分けて三陸沿岸の小学校や北上山中の小学校を訪ねたことは数知れません。

また、東京女子大学、恵泉女学園、新渡戸文化学園には新渡戸稲造を記念する記念室が設けられています。

こんなに多くの学校にかかわり、しかも最高学府から小学校にも十分通えぬ貧しい家庭の子供たちの補習校までに、それぞれ深い影響を及ぼした人物は、日本の近代教育史上にもほとんどないでしょう。まさに教育の新渡戸です。

② 著作

新渡戸稲造はその七十一年の生涯において、実に多くの著作をあらわしました。しかも、英語、ドイツ語の学術的著作、日本語での滋味豊かな画期的な著作（『農業本論』）もあり、そのほか、若い人達とくに学生でなく勤め人のための修養もの、若い女性のための生活指針、欧米人傑の印象や外交上の留意、留学譚、西洋古典講解（『衣服哲学講義』）、などが少くありません。

教文館から出ているその全集は二十三巻と別巻二巻、計二十五巻にわたります。しかも各巻の頁数は五〇〇頁から七七〇頁、全巻で一五〇〇〇頁を越えます。さらに日本語で雑誌や新聞にのせたものは、まだ殆ど収められておらず、生

前単行本として出版されたものと、外国語著作（本と雑誌掲載文）が収められています。

それに加え、宮部金吾宛六十通、ジョンズホプキンスのH・B・アダムズ教授宛二十四通、『武士道』に長文の「緒言」を寄せたW・E・グリフィス宛十二通、エルキントン家宛十六通、A・C・ハーツホーン宛四通、R・G・モリス宛二通、W・H・P・フォーンズ宛二通、N・M・バトラー・コロンビア大学長宛二通、M・E・ドイッチュ宛三通の全百十五通が、原文・訳文とも収められています。日本語で邦人に宛てた手紙は一通も収められていません。これの収集自体が多量の労力を要することもあり、それは今後のこととしています。

その他、『武士道』については邦訳はすでに六、七種類出ており、文庫本としては『自警』『人生雑感』『修養』『随想録』『東西相触れて』などが各社から出ています。

死後三年を長らえる本はないと自ら書いた新渡戸ですが、今、死後八十年をこえても次々と文庫本が出、研究書、伝記、浩瀚な「事典」まで出、内外大学で博士論文のテーマにも取り上げられていて、その著作の影響は今後も消えることはありません。

③人格的影響

(i) 生前の直接的影響

新渡戸稲造は七十一年の生涯で、実に多くの人と交わり、幼い子供たちから青年、花のように若い少女たちから年老いた人々、最高学府に身を置く将来の指導者から小学校にも通えず親や弟妹の為労働する子供たちに、深い人格的影響を与えました。

それは教えをうけた期間だけの影響ではなくて、その人の生き方を根本から変え、その子の魂の底に火の玉となつて宿り、その人生全体を誠実に、人の為に、神に仕え、少しでも貧しさや病いに苦しむ人を助け、励し、慰さめるのに尽す原動力として働いたのでした。

そのことは、妻のメリー・エルキントン、養女のこと子、孫の加藤武子などの書かれた文からも、伺った話からも、

知ることができません。たとえばメリー夫人は、『幼き日の想い出』の「はしがき」で夫の稲造がもっていた室蘭の土地が債務不履行で失われたとき、とてもきつく夫に抗議したさい、稲造が口にした言葉を書き留めています――

「私は、あの人が困っていた時、助けるためにあの土地を買ったのだよ。私は金儲けの気配さえも避けたいと願っている。北海道にいた頃、私は公職にあったのだ」。

そして夫人はこう書き添えています。

「こういう次第で抗議を申し立てた私の負けとなりました。いつも軽卒な判断を後悔し、夫よりも低い水準で物事の判断をしていたことを悟りますと、恥ずかしい思いがいたしました。彼がする決断に私共の考えが一致しないことは、めったにありませんでした。物事の判断に道義の根本が伴う場合、常に私共は一致しておりましたことを嬉しく思います」（全集一九卷五八八頁）。

妻子、親族だけでなく、生徒も学生も、外国人も、稲造に触れ合うことが深いほど、その心からの奉仕に、その人格に、学識に、現実的判断に、無私の思いやりに、ユーモアに、悲しみに、皆感動し、魂の浄化、心の開放をおぼえるのでした。

それはその人たちの心を静かに創りかえ、その創りかえられた心が世の多くの人々へと水輪みなわのようにしづかに広がってゆくのでした。

(ii) 死後の感化

稲造が召されたとき、私はまだ二歳でした。戦前に義務教育を了えた者として、私たちの習った国定教科書には、新渡戸稲造のことは一言たりとも出てきませんでした。修身にも、国語にも、一行も一語も出てきませんでした。新渡戸稲造は全く国民から覆い隠されていました。

ひとり矢内原忠雄が戦争中岩波書店から出した『武士道』（翻訳・文庫）、『余の尊敬する人物』（新書）だけが、国民の手もとに新渡戸稲造を近づける確かな道でした。敗戦時中学三年だった私は、岩波から出ている右の二書を読み、高

校生、大学生の時に、古本屋をまわり、公立図書館を訪ねて、新渡戸の著書を借り出し、むさぼるように読みました。そして石井満の『新渡戸稲造伝』も入手して読みました。

私はとくに『人生雑感』と英文著作に深く感銘をうけました。前者はクエーカーの集会で話したものを国井通太郎が筆記しまとめたもので、新渡戸の話しぶりがよく心に響くのと、新渡戸の信仰が実に実際の行動と一致していることに心打たれました。また新渡戸の英文著作は、その魂の最も深く最も高いものを十分に表現しているのに、感動しました。とくに“Thoughts and Essays”の短文は全く散文詩といってよいほどその魂の奥底をうかがうことができ、それは晩年の“Editorial Jottings”で完成の境に至り、自由に、人間と世界の深底を鮮かに示す域に達しています。心打たれる名文の宝庫と思います。

新渡戸稲造の英文および和文著作は、そこから溢れ出る、広やかな清い心、そのこの現世を超えた霊の高みを伝え、小さきものへの愛にあふれ、人間の魂の博さの限り、暖かさの極致、その思いの深さと高さの果てを、いつも確と伝えてくれるのです。

新渡戸稲造の文は、私の魂の拍動とその振動が一致共鳴し、生前その聲咳に接したことはなくとも、今眼前に在すがごとく思われるのです。私は親しく稲造に接する夢を三度もみました。人格的影響は新渡戸の生前に限りません。むしろ、没後の方が広く深く数多くの人に及ぶでしょう。そう信じている私は、老いて同じような心の体験をしている少女に出会ったのです。

(iii) 應家葵さんのこと

應家さんは、岩手県岩泉町立浅内小学校六年生（二〇一三年に）の、可愛い、どちらかといえれば小柄な女兒です。

二〇一二年八月三十日盛岡で開かれた「新渡戸稲造生誕一五〇年祭」のとき、私は彼女に会いました。この祭の記念事業として、小中高生の作文コンクールを実施しました。應家さんはこのコンクールで多くの年上の応募者にまさる、素晴らしい文を寄せ、見事最優秀賞を得たのです。これまで、何度も作文コンクールは行われましたが、こんなことは

初めてです。

東京のある中学校では、課外授業に新渡戸の本をつかい、その中の随意のテーマを選んで書かせた中の秀れたものを、数多く応募させましたけれど、岩手の北上山中の全校生徒たった十一人の小さな小さな小学校、一年生と六年生はいない学校の五年生（当時）の書いたものに及ばなかったのです。

それは新渡戸稲造が残したものは何かに、深くかわるのです。

新渡戸稲造は郷里盛岡へ帰ったときは、いつも暇を見て小学校をたずね、生徒に話し、生徒の話をお聴くのを好んでいしましたが、一九一六年（大正五）夏には岩手県に帰った際、県南から三陸沿岸にぬけ、北上して広く北上山中をぬけて盛岡へ帰る道筋を選んで、地方事情を観、郷土の農村、漁村の実情を实地に見てまわったのです。

当時のことを書いたものによると、四月十三日から五月末まで一月半、新渡戸は東南アジア視察に出かけました。当時、新渡戸は東京帝大の植民政策講座の教授でしたから、これは公務出張です。そして六月、七月は東京ですごし、七月三十日には郷里盛岡へ帰り、一日おいて八月一日から二十五日間の旅に出たのです。

汽車で南下して花巻へ、そこから東へ入って遠野から釜石へ、釜石からは鉄道はなく、船で山田から宮古へ、宮古で陸へ上って閉伊川沿いに西の茂市へ、茂市から当時鉄道の終点だった浅内をへて岩泉へ、岩泉から北上山脈越えは人力車等で西北上して葛巻へ、葛巻から西へ下って沼宮内へ、南下して荒屋新町から浄法寺、天台寺をへて盛岡へという、岩手県の東南一巡、北上山脈横断、陸中歴訪の大旅行でした。そのあと、二十五日からすぐに発つて、世田米（今は住田町）から陸前高田へ盛をへて下り、盛岡へ戻り、東京へ帰ったのは八月三十日、つまり、八月一杯は郷土歴訪の大旅行でした。

この間途中の町では一日少なくとも二度は講演をしています。昼は小学校で子供たちに、夜は寺院か学校を借りて村や町の人々に話をしました。

稲造が浅内小学校を訪ねたのはこの大正五年八月十七日でした。当時この小学校の生徒は七十人、校長先生夫妻が複式授業で教えていました（今は全校十一人、森の中の人口二八〇人の小さい町です）。

稲造は暑い夏に、汽車に乗り、人力車に乗り、船を使い、山を越えて、山村の小学校をおとすれ、「皆さんの中から世の中のために尽す人が出るように」と励まし、学問の大切さを教えたのでした。

九十六年前、ただ一回だけ訪れたこの日のことを、浅内小学校は忘れていなかったので、新渡戸の訪問は、子供たちに、そして校長先生夫妻に、村人たちに、消えることのない影響を残したのです。

そして稲造の生誕百五十年の記念の日に、盛岡で、その只一度の訪問が今もなおその薫りは消えず留って、浅内小学校の数少ない生徒たちの心の中に、はつきりとした姿を留め、そのことが、日日子供たちを励まし続けていることが明らかになったのです。私は後日應家葵さんに手紙を書き、『新渡戸稲造事典』を送って、礼をのべ励ましたのでした。

五、結び

この地上にあるものはすべて時とともに失われ、消えてゆきます。豪壯な邸宅も、静穏な別荘も、住む人を失えば荒れてゆきます。美しい樹々、四季華やかな花々に彩られた庭も、手入れが遠ざかると八重葎むくろにおおわれた荒地に戻ります。

克苦精励、食をも節して集め、先人の英知、天然の神秘を告げ知らせてくれた書物も、時移り紙は虫喰い変色すれば、誰もひもとかなくなり、暗然と地下の書庫の片隅に朽ちゆく日を待つだけとなります。

金を投じてようやく入手し、日日賞で親しみ、厭かず眼と心の喜びとしたものも、破れ、汚れ、割れ、欠け落ちて、誰一人顧ることもない廃品となります。

世の人が皆ほめたたえ、自らも心豊かに喜びとして受けた名誉も、世の移りゆくと共に誰一人憶えもせず、徒らに年鑑の一行を埋めるに留り、それすらも社会変動とともに失われてゆくこととなります。

大なる抱負を抱いて、世に尽すと信じて開いた学苑も、社会の変転、子供の減少とともに成り立ちゆかず、やがては門を鎖すことともなります。

人間の営みは永遠の時の流れにかかつては、山川の流れに砕ける石のように、その形を留めるのはしばしのいとまであります。国すら亡び、国語すらもやがては消え果てて、千古の真理をたたえた言葉を、誰一人心に解することがなくなることも、なしとしません。

まことに人間の業も営みも、果^はかない限りであります。

では、新渡戸稲造はこの世界に日本に何を残したのでしょうか。

新渡戸は遺言を残しませんでした。カナダのヴィクトリア市にあるロイヤル・ジュビリー病院に三十二日間入院したときにも、英文大阪毎日・東京日日への“Editorial Jottings”（『編集余録』）の英文は、ベッドに仰向けに寝ながら、鉛筆で大きな字で、ほとんど毎日厚紙に書いて日本へ送りましたし、新渡戸が軽井沢の別荘の中を流れる小川のせせらぎを懐しむので、付添人が洗面水道を使ってその音を出そうと苦心しました。しかし新渡戸は回復を信じて、遺言などに心をういませませんでした。

遠^い友^い夜^い学^い校^いについてみても、宮部金吾もいましたし、教え子も北大の教員に何人もいましたから、心配はしませんでした。じじつ死後はメリー夫人が校長となり、その没後には弟子の半沢洵がついで、一九四四年（昭和一九）の名誉ある閉校まで、夜学校を守りぬいたのでした。

新渡戸稲造はとくに人爵の名誉を求めませんでした。葬儀のとき、昭和天皇は新渡戸に勲一等瑞宝章をさずけましたが、彼はそれを身につける機会はありませんでしたし、墓石に勲位を刻むこともしませんでした。天から授かる天爵のみが、真に価値があると新渡戸は考えていました。

ですから彼はこの世に金銀財宝を残そうとは思いませんでした。家族や妻メリーにもそのような気遣いはしませんでしたし、家族もそれを何とも思いませんでした。むしろ、本も別荘も然るべき所へ寄附したのでした。

内村鑑三は、その死の時には、息子祐之は帝大教授でしたから何の心配もありませんでしたが、年下の妻静子の暮しを思つて、鑑三は相当の生活費を残しました。新渡戸稲造には、しかしそのような心遣いがありません。彼はすべてを神に委ねていたのでしよう。

稲造が唯一残したがゆえに、遺族も、友人も、弟子たちも、心をこめてその存続につとめた遠友夜学校も、戦争の推移と軍部の軍事教練要求をかわして、一九四四年廃校することに決めたのでした。

新渡戸稲造は、この地上に何一つ形あるものとして残しはしませんでした、残そうとも思いませんでした。しかし、おのずと残ったものはありました。それは、さきにも述べた北上山中の小さな小さな浅内小学校の思い出です。たった一度の訪問が百年間近く、町の外の誰にも知られず、知らせようとさえされず、脈々と浅内の中に継承されていたのです。今浅内町は人口も二八〇人に減り、全校十一人となりましたけれど、稲造のその一度だけの訪問は、校長夫妻（先生はこの二人だけ）にも村人にも深く記憶され、町で育った大人たちすべての心にもしかと刻まれて、百年近く生き続けたのです。

遠友夜学校も似たような経験をしました。稲造は、病気で札幌を去って以来、台湾に、京都に、東京に、ついでは遠くスイスのジュネーヴに働きの場を移し、帰国してからも東京、京都、大阪、やがては北アメリカ大陸へと活動の場をいそがしく拡げ、遂にカナダのヴィクトリアで死んだのでした。その間、一九三一年（昭和六）五月十八日の夜、遠友夜学校を訪れ、「学問より実行」の横額揮毫を行い、授業も見、生徒たち全員に話をし、並んでいる一人一人の手を握って話しかけ、別れたのでした。

その時の稲造のことを一生涯忘れず、戦争中夫人がアメリカ人だと悪口を言う軍人がいても心にもとめず、敗戦後暗れて稲造の心を守り生きた誇りを何よりの徳として、機あるごとに語る八十媪もいます（中村幹生）。

また、もう少し年少で稲造と対面した思い出を心に蔵する老少女は、「遠友夜学校」と題して短歌十首を『さつぽろ市民文芸』に投じましたが、その中から三首を引けば、

淡き灯ひに集ひ来たりて唱和せる

夜毎の歌の魂たまのふれあひ

夕礼に夜毎仰ぎし慈愛の眼

今は胸像がエルムの森に

「稲像夫妻の写真が掲げられていた」

ハルニレは天空突きてそよぎをり

青年を視つめ百年は経ぬ

(梅野きん子)

新渡戸稲造が残したものは、形なきもの、靈の香り、人格の徳風です。それは小さな町の少数の名もなき弟子たちが、まだ幼い時心に留めた記憶であつても、その人々の心の中に生涯留つて、この乱れ切つた世の中を、「正直、親切、思いやり」に徹して生きぬく勇気を与えてきたのです。

新渡戸稲造は自分から進んで何も残そうとしませんでした。ただ、キリストの心を心として生きぬいたのです。それ故に主はそれを嘉して、恵みを与えられました。主の恵みは、いとささやかであつても、百年の風雪に耐え、天において認められている最大の栄光です。

箴言三章三四節のいうように(新共同訳)、

「主は不遜の者を嘲り、

へりくだる人に恵みを賜わる」。

(終)